

[Material]

Implementation of Problems-Solving Learning for Group-Work Practice for Crisis Intervention in Each Period of the Lifecycle

— Cultivation of Research-Oriented Thinking Utilizing Portfolio —

Yoshiaki Matsuoka* and Syuichi Okuno*

* Department of Nursing, Faculty of Health Science, Aino University

Abstract

In 2014, the Department of Psychiatric Nursing, Faculty of Nursing at University “A” implemented a problem-solving learning system designed to promote independent learning and critical thinking. We enhanced research thinking and portfolio learning within the same learning system and implemented it in group-work practice in the Lifestyle and Mental Health Course of the Psychiatric Nursing Support Program in the first semester of 2016. We divided 94 second-year students into 20 groups of 4 to 5 members. The Lifestyle and Mental health Course comprised six sessions, introduced with an orientation to group-work practice and a presentation on problem-solving thinking. The six sessions were divided into three stages: “Introduction,” “Application 1” and “Application 2”; and the theme of group-work practice was crisis intervention in each period of the lifecycle. Although all groups achieved their goals and targets, some differences were observed among groups and members in the ability to express the ideas and content of role performance. These results highlighted the necessity of clarifying the meaning of problem-solving and research-oriented learning, as well as the role of teachers as facilitators, and suggested directions for system improvement for the cultivation of independent research-oriented thinking.

Key Words : lifecycle, problem-solving learning system group-work practice, portfolio, independent learning and critical thinking

ライフサイクル各期の危機介入における 問題解決型グループワークの試行

—— ポートフォリオを活用した研究的思考に向けた育成 ——

松岡 義明*, 奥野 修一*

【要旨】 平成26年度より、A看護大学看護学科精神看護学領域では、主体的学習と思考を高める問題解決型学習を展開してきた。今回、平成28年度2年次前期94名を対象に、精神看護学援助論の単元「暮らしの場と精神保健」において、研究的思考強化とポートフォリオ学習を加味した問題解決型学習をグループワーク演習で実施した。テーマは、「ライフサイクル各期における危機介入」で、1グループ4～5名の20グループで編成した。単元構成はグループワーク演習の説明から発表迄の6コマを問題解決の思考づくりを軸に、「導入」「展開1」「展開2」の3つとした。演習終了時は、全グループ目的・目標を到達していたが、グループやメンバー間で発言能力や役割遂行内容に差異がみられた。課題として、問題解決型学習と研究志向型学習の意味づけや学習の仕方、教員のファシリテーターとしての役割があげられ、主体的な研究的思考育成に向けた改善の方向性が示唆された。

キーワード：ライフサイクル、問題解決型グループワーク学習、ポートフォリオ、研究的思考

I. はじめに

現代の学生の特色として、少子化や核家族化による自律・自立の希薄化、学歴偏重主義による応用能力や社会的スキルの低下、多様な価値観、IT化によるコミュニケーションスキルの低下が挙げられる。

私たち看護職は、対人関係能力をベースにおき、専門的な“知識”“情意”“技術”の統合を図った援助が求められる。また時代の変化や多様なニーズに対応できるような役割を発揮できる為には、与えられた仕事ができるのではなく、何をすべきか主体的に考えることができ、状況に応じた判断や意味付けができる能力が必要となってくる。

そうした時、看護基礎教育で求められるものは、①科学的根拠に基づいた問題解決能力、②論理的な思考構成に基づく研究的思考、③主体的な学習および自己研鑽ができるということではないだろうか。その為には、講義、演習、実習の系統的な教授と主体的に創意工夫して問題解決していく学習方略が必要となってくる。特にグループワークという協働作業を通して主体的に問題を解決していく学習は、現代の学生はもとより、看護師を目指す学生にとって効果的な教授方法と考える。

2年生の精神看護学援助論のなかの単元「暮らしの場と精神保健」における「ライフサイクル各期における危機介入」でポートフォリオを活用した問題解決型

* 藍野大学医療保健学部看護学科

グループワーク演習を実施している。今回平成 28 年度の同単元において実施内容と今後に向けた課題が示唆され、それが教育研究に向けた基礎資料になればと考え報告する。

II. 精神看護学の授業概要

A 大学における精神看護学領域関連の学習進度

1 年次後期：精神医学概論 30 時間

2 年次前期：精神看護学援助論 30 時間、後期：精神看護学概論 30 時間

3 年次前期：精神看護学活動論 60 時間、後期：精神看護学実習 90 時間

4 年次後期：卒業研究（事例研究）

III. 精神看護学援助論の概要

1. 対象学生

平成 28 年度前期，精神看護学援助論履修生 94 名。

2. 精神看護学援助論の到達目標

- 1) 心の健康に対する基礎理論について理解でき、看護の場（家庭・学校・職場）に応じた精神保健の問題とその援助について考察できる。
- 2) 医療現場における精神保健と将来看護職になる上での自己の精神保健を保つ必要性と方法について理解できる。

3. 精神看護学援助論の授業内容

- 1) 心の健康と自我形成
- 2) ・3) 発達論（エリクソン，S・フロイト，A・フロイト，ボイルビィ，マラー）
- 4) 青年期の発達課題と危機（提出されたレポートをベースにグループワーク）
- 5) 危機・ストレスに関する理論
- 6) 危機と自然災害における精神保健（PTSD，パニック障害等）
- 7) 暮らしの場と精神保健の概要。グループワークの説明
- 8) ~12) 暮らしの場と精神保健（グループワーク）12) で発表
- 13) 医療現場における精神保健（患者に焦点をあてて）とセクシュアリティへの援助
- 14) 医療現場における精神保健（看護師に焦点をあ

ててバーアウト・リアリティーショック等），リエゾン看護

- 15) 医療者の心の健康の保ち方（内観・アサーション・体験からの対処）

IV. 単元“暮らしの場と精神保健”の概要と授業展開

1. 概要

1) テーマ：「ライフサイクル各期の危機介入」

2) 目的・目標

・目的

ライフサイクル各期の“家庭”“学校”“職場”における危機介入への問題解決型学習を通して研究的思考の育成を図る。さらにグループワーク演習を通して協同性を身につける機会とする。

・目標

- ① 現代の生活の場におけるライフサイクル各期の危機を理解し、人間の発達段階をふまえ、精神保健に及ぼす影響と問題の背景・要因を考えることができる。
- ② ライフサイクル各期における危機介入（予防や対策）について考えることができる。
- ③ グループメンバー各自が自主的に参加し、問題をグループで共有して考え、自分の意見を言うことができる。また、他者の意見を聞くことができる。
- ④ ポートフォリオ学習を通して構造的な思考を身につけることができる。
- ⑤ 口頭発表（プレゼンテーション）のプロセスについて理解することができる。

3) 時間数：6コマ（9時間）

4) 準備物：学生は A4 版ファイルを 1 冊用意する。各グループ 1 台のノート型パソコンを用意する（用意できないグループは教員が用意する）。

2. 授業展開

1) 導入迄のレディネス

2 年次前期の精神看護学援助論における“暮らしの場と精神保健”の問題解決型のグループワーク学習に際して，“心の健康”“発達や危機に関する基礎理論”“医療現場とメンタルヘルス”を教授し、基礎的理解を深めた後に実施した。導入に際して、キャプランの予防精神医学（一次予防，二次予防，三次予防）を

ベースに“場と各ライフサイクルにおける介入”の概要をマトリックスで提示した。このように全体像を押さえた後、「ライフサイクル各期の危機介入」というテーマでポートフォリオを活用した問題解決型のグループワーク演習について説明した。なお、1年次の精神医学概論において、ポートフォリオ学習に準じたフィールド調査を実施し、ポートフォリオ学習の積み重ねのうえ、展開している。

2) グループワーク演習の事前説明

(1) グループ編成とテーマ時期の選定

メンバー構成および担当する時期は教員で提示した。1グループ4~5名をランダムに選定し、乳幼児期、学童期・思春期、青年期、成人期、老年期、災害の6つの各ライフサイクル(テーマ)に振り分け、A群、B群それぞれ10グループで構成した。

(2) 授業時間外学習(個人ワーク)

グループワーク演習に入る前に、まず個人ワークで担当する時期の危機について、仮のテーマとその理由について考え、そのテーマに即した資料を収集させた。表1参照。

(3) グループワーク演習の参加姿勢とグループメンバーの役割の説明

グループワーク演習を進めるにあたり、参加姿勢とそれぞれの役割について以下のことを説明した。

① 参加姿勢

グループワーク演習ではリーダー、サブリーダー、メンバーの役割について理解し、グループメンバーが“良く聴く”“良く言う、自己表現する”“気持ちの良い論議、意見交換”を意識し、グループワーク演習を円滑に進めていく。

② 役割

・リーダーの役割:

グループメンバーの意見を取りまとめながら、議

題に対してグループワーク演習が円滑に進行することに努める。

・サブリーダーの役割

リーダーの役割に対する補助を行い、グループワーク演習が円滑に進行するように努める。

・メンバーの役割

リーダー及びサブリーダーの意思を確認しながら、自主的に自分の意見を述べるよう努める。そして目的、目標達成に向けて協力する。

(4) 問題解決型学習とポートフォリオ学習の説明

① 問題解決型学習の必要性

アメリカの教育学者である John Dewey の学習理論(「受動的な学習から能動的学習に向けて学生自ら問題を発見し解決していく学習方法である。」)を基に精神看護学援助論にてライフサイクルの危機介入についての学習を深めていく。その際、教員が予め準備した授業案に従って学習するのではなく、与えられたテーマについて、疑問を持ち、それはどうしてだろうと考える。そして仮説を立て、その仮説が理にかなうかどうか、自分たちで様々な文献から確認していく。もしその仮説が外れているのなら、また新しい仮説として立ててみる。その試行錯誤のプロセスの中に、共同性を身につけるといふ学習の目的があることを説明した。

② ポートフォリオ学習の必要性

ポートフォリオとは学習の過程で創出されたものすべての資料を保存するのではなく、資料として残す意味があるものを選んでファイル化し、整理していくものである。すなわち達成しなければいけない課題をファイル整理で明確化し、課題解決を図っていく。そして自己の学習への達成を評価し、活用して意味があることを説明する。さらに元ポートフォリオと凝縮ポートフォリオの意味と意義について以下のように付け加え説明した。

・元ポートフォリオ

今回のグループワーク演習で使用した資料は、ファイルに全部挟み込むようにしていく。教員が配付した資料、文献や調べたもののコピー、グループワーク演習時の見解等、グループワーク演習に関するものすべて綴じるように説明した。

・凝縮ポートフォリオ

元ポートフォリオを使って自分たちの伝えたいことを凝縮して整理したものであり、グループに指定された用紙(表2)とパワーポイントでの発表資料、自己の見解を記したものを各自綴じるよう

表1 ライフサイクル各期における危機介入テーマの決定(個人ワーク)

() G グループメンバー氏名(全員)
・
・
テーマ:
なぜその危機に焦点をあてテーマとしたか、その理由

表2 グループワーク資料

() G グループメンバー氏名 (全員) ・ _____ ・ _____ ・ _____ ・ _____ ・ _____
①テーマ:
②なぜその危機に焦点をあてテーマとしたか, その理由
③その時期の特性と発達課題
④調査方法と用語の定義
⑤その問題が派生する原因, 要因, 背景 (文献の活用を図る)
⑥今後に向けた予防と対策 (なぜ予防や対策が必要なのか理由, 根拠を踏まえて記載)
⑦グループワーク演習を通しての見解
⑧引用・参考文献

に説明した。

3) 展開1 (グループワークの進め方及び資料作成)

(1) グループワーク演習の内容

ライフサイクル各期 (乳幼児期, 学童期・思春期, 青年期, 成人期, 老年期), 災害の6つに分類した。その後, それぞれの時期の危機を抽出し, 仮説を立て各期における原因や背景を踏まえ, どのような予防や解決方法があるのかをグループワーク演習を通じて問題解決に向け理解を深めた。また根拠となる資料や文献の収集方法と系統的な分類や整理の意識化を図る為に, ポートフォリオ学習を取り入れた。なお, 1年次の精神医学概論において, ポートフォリオに準じたフィールド調査を実施し, ポートフォリオ学習の積み重ねのうえに展開している。

(2) グループワーク演習の進め方

グループワーク演習を行う主な項目は, 「テーマ」「そのテーマを選んだ理由 (動機)」「その時期の特性と発達課題」「調査方法と用語の定義」「その問題の派生する原因, 要因, 背景」「今後に向けた予防と対策」「グループワーク演習を通しての見解」「引用・参考文献」の8項目で構成した用紙を各グループに配布し検討させた。表2参照。

①「テーマ」

個人ワークで考えた仮テーマと個人が収集した

資料を基に各ライフサイクルのどの危機に焦点を当てるのかをグループで討議し, グループとしてのテーマを決定する。

②「そのテーマを選んだ理由」

なぜこのテーマを選んだのか, 興味をもったのか, 研究論文でいう研究動機の部分である。明確な動機づけに向けて個人が収集した資料を基にグループ間での共有を図り決定する。

③「その時期の特性と発達課題」

テーマで挙げたライフサイクル各期における特性について, エリク・H・エリクソンの発達論をもとに, なぜ危機的状況になるかの根拠を明確にする。

④「調査方法と用語の定義」

調査方法は, 主に文献による調査とした。調査を進めていく中で, 主要な用語については, 言葉の意味を明確にし, 定義する。

⑤「その問題の派生する原因, 要因, 背景」

テーマに挙げた問題の原因や要因, 背景などを「テーマを選んだ理由 (動機)」を踏まえ, どうして起こるのか, 影響は何なのか, その原因や要因を引き起こす背景には何があるのか等, 文献を活用しながら話し合いまとめる。

⑥「今後に向けた予防と対策」

ライフサイクルの危機介入で現在すでに存在し

ている予防や対策を調査し、それをもとに他の予防や対策についてグループで討議した。なお、提示した予防や対策の理由・根拠についても記述する。

⑦「グループワーク演習を通しての見解」

今回のグループワーク演習を通して、目的・目標の達成度やグループワークの進行状況について、自分の学習に対する見方や考え方、取り組み姿勢など話し合った結果をまとめる。

⑧「引用・参考文献」

今回のグループワーク演習で活用した文献やインターネットの出典の記載は、卒業研究と同様の記載方法を提示した。なお、電子文献（インターネット）の場合は、著者名、タイトル、アドレス、入手日を記載するように説明する。

(3) プレゼンテーション資料（パワーポイント）の作成

① 目的

限られた時間（発表時間5分）の中で、正確に情報を伝えるために効果的に研究成果を相手に伝える。

② 留意点

グループワークで得られた重要な結果（どうしても示したい内容）、つまりグループのオリジナリティを意識し、テーマから何を主張したかを整理し発表する。

③ 資料の様式

パワーポイントのスライド数は6~10枚（図や表を含む）で構成し、アニメーションの有無は自由裁量とする。表3参照。

表3 パワーポイント作成の構成例

- 1) テーマ
- 2) テーマ設定の動機・理由
- 3) 用語の定義：例～虐待であれば、簡単にその定義
- 4) 発達段階の特性（ポイント）または、テーマ
- 5) 研究方法：文献検討、事例検討、アンケート調査
- 6) 結果・考察
 - ① データや現状
 - ② 問題の背景や要因、原因
 - ③ 予防と対策
- 7) 結論
グループの見解
- 8) 参考・引用文献

4) 展開2（発表概要）

(1) 発表方法について

① 発表者と発表時間

発表者は、各グループから2名選出し、発表時間は5分とした。4分終了時にタイムキーパーが1回ベルを鳴らし、5分経過で2回ベルを鳴らす。発表を途中で止めることはしないが、ベルが鳴った時点で、発表者は手短かに終了するように調整を行う。

② 発表会場の配置と役割

会場設定は、図1に示すような体形で発表を行い、司会者、タイムキーパー、質疑応答用のマイク係は、学生より選出し、学生主体の運営とする。

(2) 配布資料

各グループで作成したパワーポイントを配布資料（A3用紙2枚）とし、各学生に配布した。

(3) 発表の運営

グループワーク演習前に各グループで決めていた司会1名、タイムキーパー2名、質疑応答用マイク係2名で発表会の運営を学生主体で行った。総合司会には、あらかじめ教員から司会進行の段取りを書面

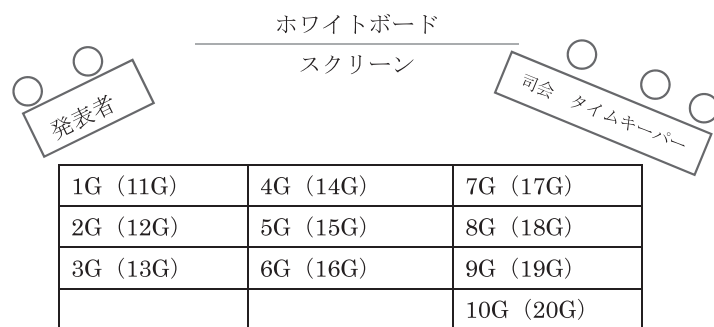


図1 会場の配置と役割

にて説明した。タイムキーパーは各群の発表時間の記録と、発表途中の鐘（4分終了時）と5分経過のベルを鳴らすよう指示した。

3. 評価方法

1) ポートフォリオにおける評価方法

ポートフォリオにおける基本姿勢と整理方法に大別し、ポートフォリオの意味理解や必要性について教員が評価を行うことを説明し、終了時ファイルを回収し評価した。表4参照。

2) グループワーク演習における評価

学生が行う個人評価と教員評価の2つに分けた。学生個人評価は、グループの作業効率、役割遂行、目標

達成、参加度の4項目で5段階評価とした。表5参照。教員評価は、テーマ設定の妥当性や根拠、文章校正力を、論理的思考では原因や背景について文献を活用して述べることができているのかを5段階評価とした。表6参照。

3) 発表に対する評価方法

学生個人が予め割り振られた他の1つのグループを評価する。その個人評価をもとにグループで討議しまとめたものをグループ評価とした。表7参照。教員評価は、5つの項目（パワーポイントの構成、発表態度、発表における共同性、発表時間、資料との整合性）で文字化し評価した。表8参照。

表4 ポートフォリオにおける教員評価

項目	内容		評価 (1点・0点)
基本姿勢	A	1) 表紙にタイトルが記入されているか	
		2) グループ名が記入されているか	
		3) 学籍番号、氏名が記入されているか	
整理方法	B	4) 元ポリオフォートと凝縮ポートフォリオの見出しがされているか	
		5) 元ポリオフォートに資料があるか	
	C	6) 凝縮ポートフォリオにPP時の自己のグループの配布資料や所定の形式でのグループ資料のコピーが入れられているか	
		7) 講評の用紙の個人分が入れられているか	
		8) 全体発表のグループ資料が入れられているか	
合計点数			点

表5 グループワークにおける評価 (学生用)

項目	内容	評価
作業効率	発表まで計画的に進めることができた。	5・4・3・2・1
	話し合いや作業に積極的に関わることができた	5・4・3・2・1
	グループはまとまりがあり協力的だった	5・4・3・2・1
役割遂行	役割に対して責任感をもって取り組んだ	5・4・3・2・1
	自分の意見をわかりやすく説明できた	5・4・3・2・1
	メンバーの考えを理解しようと努めることができた	5・4・3・2・1
	自分の考えと異なる意見に対しても柔軟な態度で客観的に聞くことができた	5・4・3・2・1
目標達成	グループ内でいやなことがあっても頑張ることができた	5・4・3・2・1
	グループワークは充実していた	5・4・3・2・1
	グループワークの達成感があった	5・4・3・2・1
	授業ばかりでなく、今回のようなグループワークは必要だと思う	5・4・3・2・1
	研究的な考え方が少し理解でき、今後自分の興味のあるテーマに取り組んでいきたいと思う	5・4・3・2・1
参加度	グループの話し合いには何回くらい参加しましたか。() 回話し合い中 () 回参加した。	5・4・3・2・1
合計点数		点
評価基準 5 (よくできた), 4 (まあまあできた), 3 (ふつう) 2 (あまりできなかった), 1 (できない)		
感想		

表6 グループワークにおける評価（教員用）

項目	内容	評価
テーマ設定	テーマと設定理由が明確である	5・4・3・2・1
文章校正力	発達段階の概要説明が整理されている	5・4・3・2・1
	グループの見解が提示されている	5・4・3・2・1
	効果的な文献の活用がなされている	5・4・3・2・1
	資料が見やすく丁寧に整理されている	5・4・3・2・1
論理的思考力	問題の原因・要因・背景が明確である	5・4・3・2・1
	今後に向けた予防や対策が明確である	5・4・3・2・1
合計点数		点
評価基準 5（よくできた）、4（まあまあできた）、3（ふつう） 2（あまりできなかった）、1（できない）		
感想		

表7 発表における評価（学生用）

項目	内容	評価
発表態度	発表がスムーズである	5・4・3・2・1
	発表が聞き取りやすい	5・4・3・2・1
	時間内で発表が終了している	5・4・3・2・1
発表内容	提示された構成で発表されている	5・4・3・2・1
	テーマと設定理由が明確である	5・4・3・2・1
	発達段階の特色が明確である	5・4・3・2・1
	問題の原因・要因・背景が明確である	5・4・3・2・1
	今後に向けた予防や対策が明確である	5・4・3・2・1
	グループの見解が提示されている	5・4・3・2・1
合計点数		点
評価基準 5（よくできた）、4（まあまあできた）、3（どちらともいえない） 2（あまりできなかった）、1（できない）		
感想		

表8 発表における教員の評価

評価項目	評価内容
パワーポイントの構成	
発表態度	
発表における共同性	
発表時間	
資料との整合性	
その他	

V. ま と め

以上、ライフサイクル各期の危機介入のグループワーク演習を、導入（全体の説明）からプレゼンテーションまで6コマの流れを、「導入」「展開1」「展開

2」というように実施した。表9参照。

今回円滑で効果的なグループワーク演習を行うために、問題解決型学習と研究志向型学習の意味づけや学習の仕方、教員のファシリテーターとしての役割の3点に絞って検討を行った。

1. 問題解決型学習について

ライフサイクルの危機介入という課題に対して、学生は各グループが担当する各期の危機を抽出する（テーマの決定）際に、戸惑いを感じている場面が多くあった。このことは対象学生が体験していない成年期以降はイメージ出来にくかったのではないかと考える。さらに、自分が体験してきた乳幼児期や思春期・青年期における危機に関しても、無意識的に体験してきたか、体験していても想起できない場合が多く

表9 グループワーク演習の流れ

流れ	コマ	活動内容	留意点	ポートフォリオ学習
導入	1	①“心の健康”“発達や危機に関する基礎理論”“医療現場とメンタルヘルス”を教授し、基礎的理解を深めた後に実施。 ②“場と各ライフサイクルにおける危機介入”の概要をマトリックスで提示し、ポートフォリオを活用した問題解決型のグループワーク演習について説明。		
展開1	2~4	①グループワーク A群(10グループ) B群(10グループ) ②別教室でグループワーク演習。 各グループの学生が用意したパソコンを用い、表2のフォーマットに沿って、まとめたデータを入力する。	各群1名の教員が担当し、各グループを巡回する形で、指導する。	元ポートフォリオ
	5	①プレゼンテーション資料作成のためのパワーポイントを表6に基づき作成する。 スライド数は6~10枚(図や表を含む)で構成する。 ②5コマ目終了後、後日放課後の時間を利用し、発表資料の印刷を行う。各群60部作成。	限られた時間(5分)で、聞き手に理解を得るためにどのように視覚で訴えるのか、テーマに対して主張したいところを意識させるように教示していく。	凝縮ポートフォリオ
展開2	6	①A群(10グループ)、B群(10グループ)別教室で発表を行う。各群で5つの発表終了後に質疑応答(5分)の時間を設ける。 ②全グループ終了後に、教員からの講評を行う。	①司会進行及び運営は学生が主体となるように配慮する。 ②教員からの講評はできる限り各グループずつ詳細に講評する。	

あったと考える。そのため一人の体験や知識ではなく、グループで意見を出し合い知識や体験を補いながら、自分に当てはまる身近な問題をイメージ化する必要があった。そしてグループワーク演習の導入初期に教員がテーマの“動機づけ”を十分にグループで討議させ、学生が自分にも起こりえる身近な問題であることを認識することで、テーマに関心をもって取り組めるよう導く必要があったと考える。

2. 研究指向型学習について

グループワーク演習における討議する内容は、テーマの動機付けから結論に至る8項目で構成し、系統的な流れで討議を進めていく意図が教員にはあった。しかし実際は、系統的な流れで討議を進めていくのではなく、各項目を学生間で分担し、十分な討議がなされないまま、最終的に一人の意見でまとめるグループもあった。このことは導入期に研究的思考学習の意味づけの強化を図る必要があったと考える。

さらに今回討議項目において「言葉の定義」を付け加えている。このことは、相手に物事を伝えていくためには言葉の意味を明確に定めて相手と自分との間で“共通認識”することが必要であることを意識させるためである。グループワーク演習の前半では、何を言葉の定義として取り上げたらいいのかわからず空白になっているグループが多くあった。このことも、同様に導入期に言葉の持つ意味に多様性があることを意

識させることが必要であったと考える。

3. グループワーク演習におけるファシリテーター(教員)の役割について

学生のグループワーク演習のファシリテーターは、目標を達成するためにグループメンバーの話し合いを促進する機能を果たす役割を持っている。そのため各グループのテーマに沿った情報提供や各グループの進捗状況を逐一把握した介入が必要であった。今回グループの特徴として、学生各々が項目を割り振り、分担して作業を行い系統的な研究的思考には繋がらず、グループ内での討議が散漫になっていることがあげられる。そのため担当している課題の作業内容を各学生に発表し、進捗状況を学生間で確認させ、結論に結び付けるために今のような情報が必要なのか、あるいは方向性は間違っていないのか討議した。また自分の役割が曖昧で何をしたいのかかわからない受動的な学生に対しては、自分が今どのような役割を担っているのか、何のために行っているのかの発言を促し、目的を意識させるように関わっていく必要があったと考える。

今回の実施した結果を踏まえ、円滑で効果的なグループワーク演習を行うために必要な手法及び講義の進め方の検討を継続的に実施していく予定である。また、実施結果についても定性的な評価だけでなく、定量的な評価も行い、そこで得られた知見を今後の授業

にフィードバックして、問題解決能力を高め、主体的に創意工夫できる学習方略へつなげていきたい。

参 考 文 献

- 1) 板谷裕子. 医学教育に求められる教育学コアスキル：問題解決型学習とコアスキル. 家庭医療 2002；9(2)：95-105.
- 2) 馬場禮子, 永井徹共編. ライフサイクルの臨床心理学. 東京：培風館；1997.
- 3) バーバラ・M. ニューマン, フィリップ R. ニューマン；福富護訳. 生涯発達心理学：エリクソンによる人間の一生とその可能性新版. 東京：川島書店；1988.
- 4) 浅沼茂編集. 「探究型」学習をどう進めるか：学習の創造的発展と問題解決力の育成（新教育課程の学習プロセス；No.3）. 東京：教育開発研究所；2008.
- 5) 木村周. キャリア・コンサルティング理論と実際：カウンセリング, ガイダンス, コンサルティングの一体化を目指して. 東京：雇用問題研究会；2010.
- 6) 佐藤浩章編. 大学教員のための授業方法とデザイン（高等教育シリーズ；150）. 東京：玉川大学出版部；2010.